

千里地理通信

橋本征治教授古稀退職記念特別号

関西大学地理学研究会会報 第60号

Newsletter of Geographical Institution, Kansai University

Contents

Pages 1-9

橋本征治教授古稀
退職記念特別号

Page 1

退職に当たって
— 小さな夢の三つ四つ —
橋本征治

Page 3-4

履歴と執筆一覧

Page 4

教員から
「場の文化」の地理学
— 橋本教授の研究
高橋誠一

Page 5

教室興隆の立役者去る
木庭元晴

Page 6

東西学術研究所の縁
野間晴雄

Page 7

橋本先生とご一緒して
伊東 理

Page 8-9

教え子から
それは野迫川村から
始まりました
高田 研

橋本征治先生との思い出

鳥山智子

潮流 矢嶋 巖

最後のゼミ生として
丸橋由起子

Page 10

卒業生だより
地理も積もれば
水となる!?
國米厚臣

学窓から

医師の地域的偏在と
解消方法
山田小紅美

Page 11-12

研究ノート
東京都特別区部における
住宅と人口の地域的特徴
とその動向 堀内千加

Page 13

実習調査報告
宍道実習調査報告
増田 紀

日帰り巡検報告

尼崎日帰り巡検
羽原康雅

Page 14

院生・学部生の業績
(2008.1~2008.12)

Page 14-15

教室だより

Page 16

随想
地理学と里山学の
出会い
細谷和海

Page 13-15

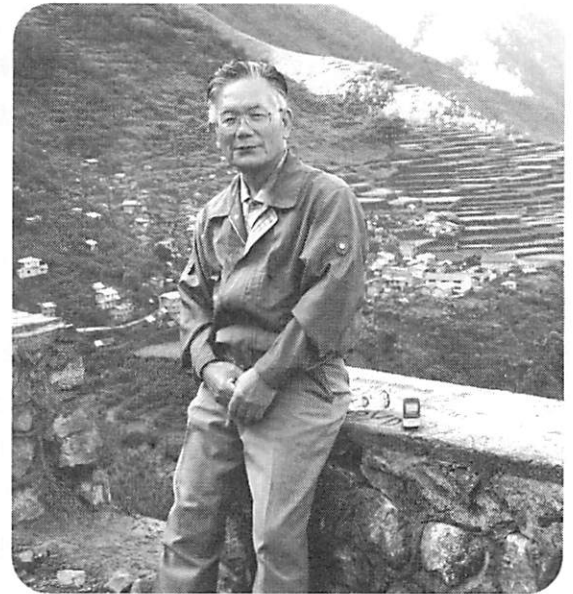
卒業生・修了生
からの一言

退職に当たって — 小さな夢の三つ四つ —

橋本征治

昨年末に3回生諸君に語る機会があり、自分の生き様の一部として、若い時代の遍歴あるいは彷徨を自分探しの旅と括って、あれやこれやの話しをさせて頂いた。その中で、大学進学、就職、大学院進学、関西大学への就任と、それぞれのプロセスにおいて様々な選択の場面があり、迷いと決断の間を彷徨することも多かったことを話した。そこで語りかけたことは、それぞれの場面においていずれかの選択あるいはなんらかの決断をしたわけだが、いずれの選択・決断をするにしてもそれは自分自身の判断であった。ここでは、就職そして大学院進学へという転向の顛末を少し披瀝させていただこう。自分探しとして自動車販売会社への就職の道を選んだものの、早い段階でその職種は自分の求めているものとは異なると感じた。しかし、当初から3年間は辛抱すると決めていたので、自分の次なる道を模索しながらそれまで待った。そして、もう一度勉強し直そうと思いを定めた時点で退職し、退路を断って地理学研究的道へと一歩踏み出し、1年後に大学院に進学した。結果的には遠回りをしたことになるが、その間に職場で学んだり、離職後もかつてのお客さんに助けられたりと得るものも多かった。とりわけ、その会社に就職しなければ結ばれることの無かったであろう縁もあっただけに、何ら後悔するところはない。

かくして、1969年に関西大学に助手として就任し、爾来40年にわたって教育・研究に携わっ



ルソン島北部、ポントク南東郊のバイヨ村と棚田を望む
(2006年9月)

てきたことになる。地理学教室の創設が1967年のことであるから、まさに地理学教室の成長とともに歩んできたことになる。その時間の長さや重みをひしひしと感じる。その間、不器用で要領の悪い筆者がなんとかやってこられたのも周りの方々の励ましと温かい支えがあったからこそこの感が一入である。

関大での40年という歳月は教育と調査・研究とでもってあざなわれ、ジグザグしながらも一筋の軌跡を描いてきたように思われる。教育の庭は一般教育と専門教育からなる。専門教育の庭では様々な場面が展開される。中でも印象深いのは学生諸君と密接に関わる演習と実習である。演習では十人十色の学生がそれぞれのテーマに取り組むわけだから、教える方もかなり幅広い知識が求められる。そのお陰で、こちらは大いに勉強をさせてもらうとともに若い活力をもらった。最近では絵画や民謡を取り上げる学生もあり、こちらに関心があるテーマだから、なんとか実ればよいがと願ってアドバイスをしているところである。今一つは3年次の実習調査である。これは、学生諸君をフィールドで鍛

えるために3泊4日で寝食を共にしながら現地調査を行い、半年かけて調査報告書を完成するというものである。これによって学生諸君は皮剥けて大きく成長してくれる。しんどいけれどもやり甲斐のある授業である。その詳細については、別途触れることにしたい。

ここ十数年、授業以外の自主的な勉強会を大学院生や若手研究者と積み重ねてきた。この勉強会では結構鋭い議論が交わされ、お互いに良い刺激になったと思う。最近では、近代をキーワードとする論集をつくらうということで頑張っている。

筆者の研究調査は大きくは国内研究と海外研究とに分けられる。国内研究については昨春に著した『マチとムラの時空—社会と暮らしの地理—』（関西大学出版部）の「あとがき」で、砺波が筆者の研究の揺りかごの地であり、学問の方向性に迷いが出た時には自ずと足は砺波へと向かい、自分を見つめなおしたことに触れた。今も、八月の夜道を遠くの祭太鼓の音を耳にしながら歩いたことが鮮明に思い出される。海外調査はオセアニアのトレ

ス海峡諸島・パプアニューギニア・フィジー・ハワイから、インド祇園精舎、台湾、フィリピンと多岐にわたる。その中で強く意識したのは伝統と近代との邂逅の狭間で諸矛盾に揉まれながらも強く生き抜いている人々の姿であった。トレス海峡のモア島の浜辺で、パプアニューギニア高地の町で、そしてフィジーの農村でと、夕食後の散歩の道すがらよく考えたのは「近代とは」、「近代化とは」ということであった。その研究成果は博士論文『メラネシア—伝統と近代の相剋—』（大明堂刊、1992）に結実した。そうした関心は今も持ち続けていて、それが先述の若手研究者との研究会のテーマへと繋がっている。

こうして想い巡らしてみると、筆者の研究の根底にあるのは人間への強い関心であり、より具体的にはそれぞれの大地、時代におけるさまざまな人々の生き様への尽きることのない興味であることに思い至る。そうした想いは今後も持ち続けることになろう。今年の年賀状には、「年あらた 小さき夢の 三つ四つ」と記させて頂いた。

（本学教授、2009年3月末退職予定）

履歴と執筆一覧

履 歴

橋本 征治（はしもと せいじ）
生年月日：1938（昭和13）年9月3日
専門分野：地誌学・人文地理学
現住所：〒562-0024 箕面市粟生新家2-10-6
電話 072-729-4019

学 歴

1954.4.1（入学）～1957.3.31（卒業）
大阪府立大手前高等学校
1957.4.1（入学）～1962.3.31（卒業）
大阪市立大学文学部文学科（フランス文学専攻）
1966.4.1（入学）～1968.3.31（修了）
大阪市立大学大学院文学研究科・地理学専攻修士課程
1968.4.1（入学）～1969.3.31（退学）
大阪市立大学大学院文学研究科・地理学専攻博士課程

職 歴

1962.4.1～1965.6.30 マツダオート大阪（株）
1969.4.1～1972.3.31 関西大学助手（文学部）
1972.4.1～1975.3.31 関西大学専任講師（文学部）
1975.4.1～1982.3.31 関西大学助教授（文学部）
1982.4.1～現在 関西大学教授（文学部）

学 位

1968.3.31 大阪市立大学 文学修士「散居集落社会の変容—鷹栖を事例として—」
1991.3.6 関西大学 文学博士「メラネシア—伝統と近代の相剋—」

役職・委員等（大学、学会、社会）

関西大学：
関西大学地理学研究会 会長（1998.4.1～2009.3.31）

関西大学史学地理学会 会長（2003.4.1～2005.3.31）
関西大学東西学術研究所 所長（2005.4.1～2009.3.31）
関西大学史学地理学同窓会 会長（2005.4.1～2009.3.31）
教職課程委員会委員長、全学共通教育推進機構免許・資格部門委員長 歴任
学会・公的機関：

人文地理学会 理事（2期：会計）、国立民族学博物館研究協力者、箕面市行政史料専門委員、箕面市紛議調整委員、砺波散村地域研究所顧問

主たる海外調査・共同研究

トレス海峡諸島、パプアニューギニア、フィジー、ハワイ、インド、フィリピン、フランス、イギリス、

執筆一覧

<著書>

地域研究

- ・『メラネシア—伝統と近代の相剋—』大明堂、1992
序章 課題と方法、第1章 メラネシア—その自然と人びと、第2章 伝統と近代の相剋—フィジー西部の村落、第3章 豊かなオーストラリアのペリフェリートレス海峡諸島—、第4章 町と村—パプアニューギニア南西岸地域、第5章 コーヒー栽培をめぐる—パプアニューギニア高地地方、第6章 いくつかの課題の検討、終章 現代メラネシアと地理学—結びにかえて
- ・『海を渡ったタロイモ—オセアニア・南西諸島の農耕文化論—』関西大学出版部（関西大学東西学術研究所叢刊18）、2002
第1章 タロイモ栽培の比較研究の意義、第2章 フィジーの農耕体系とタロイモ栽培、第3章 ハワイ諸島における農耕展開とタロイモ栽培、第4章 南西諸島の田芋栽培—

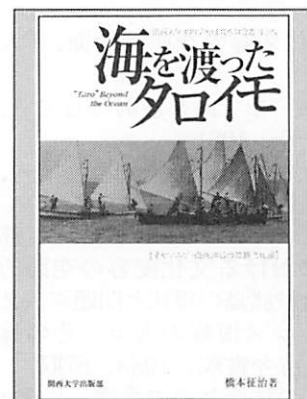
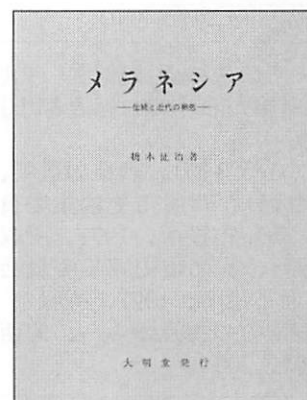
- 農耕文化論の視点から一、第5章 日本の農耕文化とイモ栽培—南方の視点から一、第6章 オセアニア・南西諸島におけるタロイモ栽培の比較研究、補論 ハワイ諸島の“池”養殖とタロイモ栽培
- ・『ムラとマチの時空—社会と暮らしの地理—』関西大学出版部、2008
- 第1章 社会の地理学的研究の視点—フランスの場合—、第2章 ブリュヌの人文地理学体系と方法—批判と展望—、第3章 散村の社会空間構造とその展開、第4章 村落間にわたる水利とその類型—近世—、第5章 神社の広域祭祀圏と広域社会空間—近世—、第6章 マチ・ムラ地域の展開と村落社会—近世—、第7章 ムラ商人の地域的展開とマチ・ムラ空間—近世後期—、第8章 現代散村の経済的・社会的変容—鷹栖—、第9章 現代散村における居住様式の変化—鷹栖—、第10章 挙家離村の実態と過疎問題—奈良県吉野山地のムラ—、第11章 共有林野の分解と存続—奈良県吉野山地のムラ—、第12章 家制度と村落社会—四国山地における隠居制山村—、第13章 都市圏の地域研究をめぐって—「文化」と「複雑性」の視点から—、第14章 “周辺”地域からみた大阪大都市圏、第15章 都市化と村落社会—大阪府南部の“周辺”地域—、第16章 住宅都市化と地域経済—大阪府北部の“周辺”都市、第17章 企業誘致と地域経済・社会—熊本市東部の“周辺”地域—
- ・編著『現代社会と環境・開発・文化—太平洋地域における比較研究—』、関西大学出版部（関西大学東西学術研究所共同研究シリーズ2）、1998
- ・編著『海の回廊と文化の出会い—アジア・世界をつなぐ—』関西大学出版部（関西大学東西学術研究所国際共同研究シリーズ7）、2009
- 教科書・入門書
- ・『人文地理—教養のための22章—』大明堂（末尾至行・橋本征治共編）、1988
- ・『新訂 人文地理—教養のための20章—』大明堂（末尾至行・橋本征治共編）、1994
- ・『人文地理の広場』大明堂（橋本征治編）、2001
- <学術論文> * 著書に所収されていないもの
- 地域研究：日本
- ・圃場整備に至る鷹栖の変容—その後の砺波散村—（共著）、大阪市立大学地理学教室編『日本の村落と都市』ミネルヴァ書房、1969、所収
- ・芦屋の農業・水産業の変容（6章3節）、戦後の農業、市制実施後の水産業（7章9節）、芦屋市史編集委員会編『新修芦屋市史：本編』芦屋市役所、1971、所収
- ・現代の農林業（第5章第5節）、箕面市史編集委員会編『箕面市史（第3巻）』箕面市役所、1977、所収
- ・日本の先史文化と周辺地域—南方の視点から—、関西大学東西学術研究所紀要37輯、2004
- 地域研究：海外
- [太平洋地域]
- ・トレス海峡諸島における文化変容の空間的側面、「人文地理」31巻4号、1979
- ・トレス海峡諸島の経済的現状—モア島を事例として—、「関西大学文学論集」30巻4号、1981
- ・トレス海峡諸島の社会的現状—モア島を事例として—、「関西大学文学論集」31巻2号、1981
- ・ダルー（1部Ⅶ章1）、カタタイ村、カダワ村（1部Ⅶ章2）、トレス海峡諸島における文化変容の空間的側面（2部Ⅰ章2）、トレス海峡諸島の現状と問題点（2部Ⅱ章7）、大島襄二編『トレス海峡の人々—その地理学的・民族学的研究—』、古今書院、1983、所収
- ・フィジーにおける土器づくりの技術とその系譜—ビチ・レブ島西部シンガトカ川流域の事例—、「関西大学考古学資料室紀要」2号、1985
- ・Irrigated Cultivation of Taro in the Sigatoka Valley, Fiji、「関西大学文学論集」39巻2号、1989
- ・ハワイ諸島における伝統的「池」養殖の地理学的研究、「関西大学東西学術研究所紀要」33輯、2000
- ・西太平洋地域の文化領域と日本の先史文化、石原潤他編『領域と移動』（アジアの歴史地理1）、朝倉書店、2007、所収
- [アジア]
- ・サヘート・マヘート遺跡とその周辺地域（共著）、関西大学日・印共同学術調査団『祇園精舎サヘート遺跡発掘調査報告書』関西大学、1997
- ・台湾蘭嶼におけるタロイモ栽培、関西大学東西学術研究所紀要40輯、2007
- <小論・エッセイなど>
- ・小さな村クビン、大きな村ダルー、「地理」23巻11号、1978
- ・伝統と近代の相克、「地理」25巻3号、1980
- ・パプア・ニューギニア南西岸のカヌー、関西大学考古学資料室「千陵」8号、1983
- ・“食べる”農業から“売る”農業へ、「国際協力」348号、1984
- ・フィジーのインド商人、「国際協力」384、1987
- ・垣内、奈良地理学会編『大和を歩く』奈良新聞社、2000、所収
- ・『千里地理通信』（関西大学地理学研究会）
- 1980：トレス海峡諸島調査に同行して（3号）
- 1981：パースペクティブ—「隠し絵」へのアプローチ—（5号）
- 1983：マニラ・ショック—都市文化と村落文化—（10号）
- 1985：揺れるビッグ・マン像（上・下）（13号、14号）
- 1987：住まい方の変化と地理学（16号）
- 1990：隣室の恵み（22号）
- 1992：提言 地理学研究会の発展を願って（27号）
- 1993：三つの情景（28号）
- 1995：イモ、魚、そして水（33号）
- 1998：フィールドワーク三態（39号）
- 1999：歳を積み重ねること（40号）
- 2001：地理は“総合”への架け橋（45号）
- 2004：逍遙、遊歩、あるいは“そぞろ”歩きのすすめ（50号）
- 2006：実景、創景、そして真景—歌川広重の世界から—（55号）
- ・『百材』（関西大学史学地理学同窓会）
- 1984：一調査者のひとりごと—私のフィジー調査日記から—（20号）
- 1988：インド雑感（25号）
- 1993：宇田米夫先生を偲んで（29号）
- 1995：ハワイ大学との共同研究をめぐって（31号）
- 2000：私の助手時代と史学研究法（36号）
- 2004：タロイモの里を訪ねて—台湾調査行—（40号）
- 2005：ご挨拶と続台湾調査行（41号）
- 2008：第一学舎からみた関大キャンパスの今昔（44号）
- ・『関西大学通信』（関西大学広報委員会）
- 1977：南の海から（76号）
- 1884：世界の大学—南太平洋大学—（141号）
- 1985：ブラ！ こんにちは南太平洋（145号）
- 1985：私の好きな新書本—おすすめの3冊—（149号）
- 1990：オセアニア料理—素朴な風土の味—（192号）
- 1996：太平洋圏における人、もの、文化のリンケージ（245号）
- ・その他
- 1984：フィジーの女性たち（「関大」328号）

橋本征治教授は、日本及びオセアニアの諸地域について、主として文化・社会地理学的視点からの実証的研究に従事してこられた。教授の研究は広く人文地理学の全般に及ぶが、あえて専攻分野を限定表現するとすれば、社会・経済地理学、地誌学、文化地理学ということになろう。教授ご自身が標榜しておられる現在の研究課題は、①「場の文化」の地理学的研究、②オセアニアの農耕文化の比較地理学的研究、③村落地域の社会・経済地理学的研究であるが、このうちで最も早期に取り組みられたのは、日本における村落地域社会の調査である。その後、海外にも研究のフィールドを広げて、壮大な視野からの文化地理学や比較地理学を展開されるにいたった。

教授の研究業績は2、3頁で紹介されたとおりであるが、その一端は『メラネシア—伝統と近代の相剋—』（大明堂、1992年）や『海を渡ったタロイモ』（関西大学出版部、2002年）などとして出版され、地理学の分野ではもちろんのこととして、隣接分野である文化人類学や社会学、民族学などにおいても、きわめて高い評価をうけてきた。さらにこの二著書で扱われている熱帯・亜熱帯に属するオセアニア諸地域および日本の南西諸島に加えて、いわば温帯に属する日本の諸地域における研究を集大成されたのが、近著『ムラとマチの時空—社会と暮らしの地理—』（関西大学出版部、2008年）である。これは日本の伝統的村落社会空間を対象として、その諸相を社会地理学的視点から追求したものであるが、単なる事例研究の集成ではない。このことは、第I部「社会の地理学的研究の視点—フランス地理学から—」において、フランス地理学派を中心とした展望を踏まえて基本的な概念の規定と論理的な構築が厳密になされていることから充分に理解できる。かくのごとき骨太の理論に支えられているからこそ、以下の富山県砺波散村地域を舞台とした散村の成立過程と起源論、近世の社会空間構造の変容、近現代の急激な変容村落の枠組み、広域的な水利組織、神社の広域祭祀圏、年貢収納圏、商品生産・流通圏、吉野山地や四国山地の近現代における山村社会の存続と衰退、共有林、挙家離村、別居隠居制、社会的流動性の高い大都市圏に関する地域研究などが、きわめて迫力のあるものとして議論されるのである。まさに橋本教授の地理学が、地域に生き、地域を形成し、地域を構造

化する人々の営為を社会的側面から綿密に論じ、かつ論理構成の基軸に社会的事象の「複雑性」と時系列的な展開を織り成した重厚な研究であることは論をまたない。

これら優れた研究業績とともに特筆されるべきは、学内外における教授の多面的な活動である。1969年に関西大学文学部に助手として着任、爾来、専任講師、助教授、教授として教育・研究に従事してこられたが、その間、多くの委員を勤められた。関西大学教職課程委員長として教員免許法改定に際しての諸問題に尽力されたこと、関西大学東西学術研究所所長として変革期の研究所の運営において多大な功績をあげてこられたことは、とりわけ高く評価されるべきであろう。また学会運営でも、たとえば人文地理学会においては2期にわたる理事のほか、評議員や協議員として寄与してこられた。さらに箕面市行政史料専門委員や箕面市紛議調整委員として、地域に根ざした地理学者としてのいわば責務をも担ってこられた。また教授が若き地理学研究者としての情熱を燃やされ、現在もなお追跡調査を継続しておられる集落地理学の聖地と言ってよい砺波平野においても、砺波市立砺波散村研究所顧問として貢献、研究フィールドに対するいわば恩返しもおられる。（本学教授）



橋本教授の4冊の単・編著

関西大学地理学教室は一枚看板の末尾至行先生によって1967年に創設された。橋本征治先生は1969年、一期生が卒業した翌月に助手として就任されている。その後、織田武雄教授などの出入りがあるが、藪内芳彦先生などを失う。藪内先生の遺稿の整理には当時の院生とともにかなりの努力をされたようで、91年泉佐野方面の実習旅行の予備調査のお供をした時のことである。橋本先生は、故藪内先生宅に立ち寄ってお参りをされ、遺稿を何らかの形で公表する約束をされた。03～05年にはH.F. トーザー『古代地理学史』の一部を共訳の形で公表されている。

実力ゆえであるが、時代としては海外調査の機会に恵まれた方だったと思う。70年代後半、トレス海峡諸島・パプアニューギニアに藪内先生、大島襄二先生とともに出かけられ、その研究の延長としてフィジーの農村に滞在して調査されることになる。後に博士論文『メラネシア-伝統と近代の相剋-』に結実する。95年前後には、ハワイ大学との共同研究（両大学でペアを組む形）を実施され、その総まとめとして、当時としては地理学では数少ない国際シンポジウムを開催され、『現代社会と環境・開発・文化-太平洋地域における比較研究-』を出版される。ハワイ大学側のフランコさんと

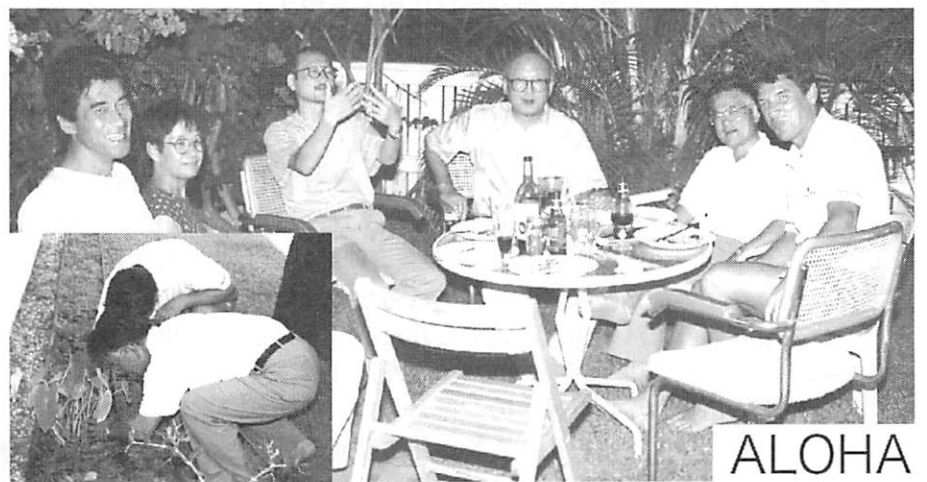
は家族レベルのお付き合いをされ、そのお陰で思えば充実した研究環境が生まれた（写真 ALOHA はフランコさんのご自宅でのガーデンパーティ、左下はフランコさんの自宅のタロイモをお二人で観察されている様子、矢嶋巖氏撮影）。日本側では先生のタロイモ研究（当時院生の矢嶋巖氏も参加、『海を渡ったタロイモ-オセアニア・南西諸島の農耕文化論-』＜関西大学出版部＞などに結実）をはじめ、多彩な研究陣で木庭も参加した。人となりを反映して、和気藹々かつゆったりと研究することができる環境であった。05年前後には台湾・フィリピンの調査を実施され、長く台湾研究をしている教え子の水田憲志氏を同道されている。

学年を越えた在学生間交流、そして卒業生をつなぐ組織として、関西大学地理学研究会は1975年に発足している。「千里地理通信」創刊は1978年である。この研究会を末尾先生の音頭取りのもと、青木先生と一緒に軌道に乗せられた。教室の草創期から最も長く在職され現在まで、教室発展のために活動をされてきた。

多くのすぐれた研究者を育ててこられた。奥野一生（現代離島研究）、石川雄一（都市圏研究）、吉田雄介（イラン手織物研究）、賀納章雄（伝統的畑作穀類栽培研究）、大槻恵美（風土研究）、矢嶋巖（生活用排水研究）などである。写真 MODERN は現在活動中の橋本先生の教え子たちが集うモダンの会の会合風景である（水田憲志氏撮影）。

橋本先生は、登山または自然散策を趣味にしておられ、サン＝テグジュペリを卒論にされたということもあって、自然地理にも関心が深い。自然地理の教員は私だけなので、長く卒論、修論の副査をよくお引き受けいただいた。業務関係の自然関係の文書もすべて丁寧に手抜き無くチェックしていただいた。感謝するとともに今後の業務に不安を持っている。今後もし指導頂きたいと思う。

（本学教授）



橋本先生にとって関西大学東西学術研究所は通曉の居場所であった。1951年4月に「東西両洋文化の学術研究、殊に比較研究を行い世界文化の融合に貢献することを目的」として設立されたこの研究所は、関西大学では最古の附置研究所で、泊園書院の蔵書が寄贈されたことに端を発する。泊園書院とは江戸時代末期の儒者藤澤東咳が大坂で開いた私塾である。研究所には学内の中国史・日本史、東洋思想史、中国語学の泰斗が集い、漢籍や中国関係の書物を中心とした重厚な研究と貴重な史料集の刊行が連綿と継続されてきた。

そのなかであって、大庭脩元所長が先鞭をつけられた漂流記、中国船搭載物の研究や資料集の刊行に象徴される、東西のもの・ひと・文化の交流や交渉史は、研究所の連綿たる伝統である。橋本先生はその栄えあるキーワードを冠した「東西交渉史班」に1995年度～2004年度の10年、さらにその後継の「比較文化班」に2005～08年度の4年と、のべ14年の長きにわたって研究員を務められた。とりわけ最後の4年間は第24～25代所長として研究所の舵取り役を務められた。

伝統を重んじ時間を超越した感があった研究所自体にも、この数年は内外から否応なく変革が要請されていた。橋本先生は所長として辣腕をしなやかにふるい、一部では特権的サロンと揶揄されていた研究所の抜本的改革を、藤善真澄前所長から引き継いで軌道に乗せられた。

「関西大学東西学術研究所々所報」第80号(2005年4月刊)にその意気込みを「あらたな出発にあたって」として書かれている。改革には2つの軸足がある。第一の軸足は開かれた研究体制作りである。そのため、研究班の公募制、幹事制度の導入、研究班の任期を2期4年に限り、所員の固定化を避けたことは特記される。第二の基軸は研究拠点機能の高度化と充実である。2005年4月には、文部科学省私立大学学術研究高度化事業の学術フロンティア推進拠点の採択を受け設立されたアジア文化研究交流センター(CSAC)が、研究所を基盤として発足した。これが2007年度に採択されたグローバルCOEプログラム「東アジア文化交渉学の教育研究拠点」の下地ともなる。それらの機関との調整に腐心されながらも、研究所独自の改革を強力に進められた。外部資金への応募を義務づけ、共同研究の成果の公刊を促して、共同研究の実体化を図られた。その一環として、常勤でない若手のためにフォーマライズされた非常勤研究員制度を設け、日本学術振興会の科学研究費等に応募できる道を開かれた。幸い、その第1号として、橋本ゼミの水田憲志氏の台湾一八重山移民研究が2008年度に採択されたのは、先生には大きな喜びであったと思う。

先生は他大学の附置研究所との交流も奨励された。2008年度には、自ら、法政大学沖縄文化研究所との交流を推進し、東京での合同研究会(1月28日)と、所長・研究員を東西研に招いての特別講演会・研究例会開催を実現された(7月2日)。

昨年12月22～23日、私が主幹を務める「比較文化班」

の最後の集いを鹿児島大学多島圏研究センターとの合同研究会として開催した。所長をはじめ、仲介役の長嶋俊介教授、火山を専門とするイギリス人留学生、石干見研究者で外国人客員教授として滞在されていた旧知のフィリピン大学のザヤス女史などと実のある交流を行い、翌日は全員で2台のレンタカーに分乗して知覧・坊津へ見学に行った。研究会で先生は「黒潮ルートのイモ栽培文化の連続と非連続」を発表された。大筋では根栽農耕のきわめて濃密な南西諸島、台湾、フィリピンの黒潮ルートが、その内部では、タロイモ、ヤマイモ、サトイモ(温帯性)、タイモ(熱帯性)などの分布に地域差が顕著である。その断絶の意味を考察された視角は、鳥の目で大局を捕らえ、蟻の動きで差違の意味を自然・文化・社会・歴史条件から考えることである。地理的分析手法の正道を堂々と隠し味にしながらも、謙虚な態度で対象に向かう。声が大きいだけの詭弁を弄する態度には与さない。

そんなお人柄は、国際シンポジウムや研究所が主導した国際共同研究でも十二分に発揮され、面倒な共同研究の交渉や協定締結、資金獲得、広報などで多大な貢献をされた。それを背後で支える研究所の事務方との潤滑油の役割を自らが果たされているからこそ、身勝手な行動に出やすい研究者集団をうまく御して成果に結びつけられた。関西大学出版部からの編著『現代社会と環境・開発・文化—太平洋地域における比較研究—』(1998)と、『海の回廊と文化の出会い—アジア・世界をつなぐ—』(2009)はいずれも文化の交流・変化・比較を主題とする。

また、先生は研究班を超えた交流にも力を注がれ、2008年1月24日には「近代との出会い—風景からのアプローチ—」のシンポジウムを組織された。さらにそれを発展させ、関西大学東京センターで、研究所が主体となった初の一般向け連続公開講座を企画された。うちに秘めた構想力を自然体で組織に活かす洗練された軽快フットワークは、私が7年前に関大着任時に感じた簡文館の旧研究所の重苦しさを急速に融解させていった。近寄りた威厳をなお放つ東京本駒込の東洋文庫や京都大学人文科学研究所東方学研究部とは違った歩みを東西研はしてほしい—それは西洋文献にも明るい東西研中興の祖、橋本先生のビヘイヴィアと重なる。(本学教授)



鹿児島大学多島圏研究所メンバーと東西研との懇親会
2008年12月22日 鹿児島島内の奄美料理店にて

橋本先生はめでたく古稀をお迎えになり、ご健勝にてご退職されます。誠におめでたいことであり、謹んでお慶び申し上げます。

さて、編集長から命を受けたこの記念号での当方の使命は、「橋本先生のお人柄・エピソード（ややプライベートな面も含めて）」の執筆ですが、私が先生のお人柄をご紹介するなんて、そんな僭越なことはとても出来ませんので、先生との思い出を書かせて頂きます。

先生と始めて一緒に仕事して痛快であったのは、奈良大学での人文地理学会・日本地理学会合同大会でした。この大会での最大の問題は「大会発表要旨」の印刷部数でした。印刷部数を減らして費用を節約したい学会VS参加者が予想以上で発表要旨が不足することを心配する開催校でもめました。私は大会会計担当で学会本部（会計）と奈良大学との調整役でしたので、橋本会計理事からこの問題について意見を求められて、「開催校の要望に反して部数を節約するのは、奈良大学の士気にも影響します。もし不足する事態になれば、奈良大学としては恥をかくことになる懸念されています。お金より気持ち大切です。思い切って1000部刷りませんか。」と、ご返事したように記憶しています。理事会の大勢が600部印刷でしたから、かなり強引な提案にもかかわらず、先生のご尽力で、結局は1000部刷りました。この一件で、橋本先生は「人の気持ちを大切にされる先生、大胆なこともして下さる先生」であることがよくわかり、嬉しくなったことを覚えています。ちなみに、この大会の参加者は893名で、人文地理学会の大会参加者数のレコード

です。

小浜市での3回生の実習調査をご一緒しました。出発の前日、橋本先生から急に「学生の移動などを考えたら、車があった方がよいので、明日は車で現地に行く」とのご連絡を頂きました。何事もぎりぎりまで熟慮される先生のお陰で、実習調査は要領よく進みました。また、この実習調査では、現地集合時間に大幅遅れのK先生に対して、橋本先生は学生の前でしっかりと怒られました。先生が怒られるのを始めてみました。お見事でした。

人文地理学会大会を関大で開催しました。橋本先生は大会委員長でした。委員長最大のお仕事は、あれこれのご挨拶と古老・大先生の接待・話し相手にあり、それ以外の時の委員長は大会本部でどっしりと構えられるケースが多いかと思います。橋本先生の場合は、少し違っていました。前者のお仕事は当然のように見事にこなされましたが、それ以外の時は会場を巡回して、学生に声を掛けられ、掲示物の配置をチェックされるなど、あれこれ心配りをして下さいました。さらに、先生は「僕はフリーハンドだから、手伝ってほしいことあれば、遠慮なく言って」と言われたのには、感激しました。会場への誘導のために各所に張っていた矢印を剥がす要員がいなかったのも、ついお言葉に甘えて「矢印剥がし役」を御願ひしてしまいました。振り返れば、委員長をこき使ったのは、関大だけだと思います。でも参加者からは、「学生さんもすばらしいし、実にチームワークのよい教室ですな」と、評価して貰いました。名委員長あつてのことです。 (本学教授)

● ● ● 橋本征治先生古稀記念事業のご案内 ● ● ●

1. 最終講義の開催

日時 2009年3月28日（土）午後3時より4時30分
会場 関西大学千里山学舎 第1学舎第1号館 A603教室
題目 「太平洋の島々が語りかけること」

★申し込み不要、当日直接会場にお越しください。

2. 橋本征治先生古稀記念祝賀会の開催

日時 2009年3月28日（土）午後5時より8時
会場 関西大学百周年記念会館 ホール1

なお、本事業に関するお問い合わせは、右記までお願いします。

〒564-8680 吹田市山手町3丁目3-35
関西大学文学部 地理学・地域環境学教室 伊東 理
Eメール：osamu@ipcku.kansai-u.ac.jp

1973年、高野山から2時間も未舗装の林道を奥へとすすむと、深い谷間に野迫川村がありました。小中学校でいうと最高位の和歌山県の5級僻地です。赴任した新卒の教員が数カ月で逃げ帰ったという山の分校で聞き取りをしました。そこでの語りを聞く経験は大学2年生だった私の人生観を揺さぶるものでした。橋本先生には2回、この野迫川村での実習に連れて行っていただきました。その際に読んだ『教育改革は僻地から』という書物に感化され、のちに山間部の多い岐阜県の教員採用試験を受験いたしました。

学部時代は当時若い専任講師であった橋本先生が私たちにとって、最も近い存在でした。

私は教員として兵庫県に採用され、その後大阪府に移り長い間小中学校に勤めました。同僚の社会科の教員と巡検を行い、各地の地理教材づくりをしました。その原点はいつも野迫川村にありました。

縁は不思議なものです。大阪府の教員として兵庫教育大学大学院に2年間内地留学をした1997年卒業間際の事でした。偶然阪急千里線で先生と乗り合わせ、そこか

ら私の次の人生が展開してまいります。それは末尾先生のご退職に際して論集を出すから私にも書けというお誘いでした。最終の原稿を仕上げるまでに随分とご指導をいただくことになり、20年の歳月を経て手のかかる弟子の復縁となりました。おそらく私に声を掛けたことを後悔されたことだろうと思います。

その後、私は国立の青年施設に3年間出向したのですが、その間に関大が社会人への博士課程後期を開きます。そこで再び先生から入学を勧めていただきました。忙しい仕事の隙間に通った大学院でしたが、若い院生の皆さんと交わした議論はとても貴重な経験でした。

現在は大学生を教える立場となりました。微笑みながら可能性を常に認めて指導する恩師・橋本先生のように、私も若い学生に対してはそうありたいと心しております。この夏、北上山系にある葛巻町で、学生のフィールドワークを実施しました。そこは昔読んだ『教育改革は僻地から』の舞台、岩手県5級の僻地です。

(1976年卒業、都留文科大学・文学部社会学科教授)

橋本先生、古稀おめでとうございます。先生の古稀とご退職のお知らせを受け、自分が学窓を離れ早や20年以上が過ぎたことを実感しています。

私が学部に入った1970年代後半は、古き関大のシンボリック存在だった中央の広いグラウンドとそのスタンドも、法文学舎へ向かう桜並木のスロープの下にあった薄暗い食堂も、スロープを上り切ったところの円形の図書館も、平和な雰囲気のある学生であふれていた。当時、地理学教室はまだ史学科の中にあり、その史学科の女子学生の間で、橋本先生といえば温厚なお人柄で人気があった。

その頃教室にいらした先生方は、青木伸好先生は別として、織田武雄先生はじめ、藪内芳彦先生、末尾至行先生、河野通博先生や後に着任された柿本典昭先生、山崎壽雄先生も、みな私達二十歳前後の学生からすればやや近寄りやすい年配の先生方であったから、まだお若くて気さくで親近感のある橋本先生のお部屋には、学生が何かにつけて集まっていたように思う。教室の事務や藪内先生の遺稿整理のお手伝いや、読書会など橋本先生のお部屋にはいつも学生の姿があった。先生を囲んでコーヒーを飲みながら、ニューギニアをはじめフィールド調査のこぼれ話をお聞きするのも楽しかった。そんな時の先生は、日に焼けたお顔でニコニコされて、お気に入りのタ

バコをくゆらせておられるのが常だった。

その後、木庭元晴先生が着任されるまでは一番お若かった橋本先生は、教室の様々な仕事を引き受けておられたから、一番お忙しい先生でもあった。講義や会議に慌しく出かけて行かれる時、万年筆などの忘れ物が無いか、上着のポケットをあちこち確認されていたお姿が、昨日のこの様に思い出される。

出来の悪い学生だった私は、先生方にいろいろご迷惑をお掛けしてしまったのだが、中でも橋本先生には、厚かましくも結婚式のお仲人までお願いし、明るく素敵な奥様とともに快くお引き受けいただいた。その時ご夫妻から頂戴した美しい輪島塗のお重は、結婚以来毎年、我が家のお正月の食卓の主役である。

私にとって、先生は常に関大の地理学教室の歩みと共にあり、先生のいらっしやらない教室とは寂しい限りであるが、先生が永年にわたり温かいお心で育ててくれた多くの人材が、今後もしっかり支えていって下さることだろう。いつもいつもお忙しかった先生が、ご退職後少しお時間に余裕が出来、ここ奥伊勢の地に鮎釣りにいらして下さるのを、山を仕事場とする主人と共にお待ちしている。

(旧姓 河田：1980年卒業、1985年M修了)

教え子から

潮流

矢嶋 巖

実は橋本征治先生の講義を受けたことがない。より正しくは、講義を受けたことはないが、演習は学部から大学院までずっとご担当頂いた。海外調査に同行させて頂く機会もあった。そのため、先生が指導される姿をよく知っているが勝手に自負するところであるが、これが講義となると見当もつかない。本当に一度も受けたことがないのだ。

それもあってか、学部学生時代の私は、橋本先生がどのようなご研究をされているのかよくわかっていなかった。フィジーがご専門の先生と思ひこみ、大学院の諸先輩方から失笑を買ったこともある。

私の学年での卒業演習の橋本ゼミでは、社会・文化をテーマにした学生が多かった。「私を含めて」物静かな学生が多く、ゼミ生どうしの交流が少ないうえに視点や対象地域もバラバラで、混成チームの様相を呈していた。ゼミとしての議論が深まりにくく、一体感も薄かった。指導にはご苦労が多かったことと思う。

博士課程前期課程では、卒論で取り上げた地域を再びフィールドとすることになり、先生がよく知っておられる市役所の担当部署をご紹介下さることになった。先生の運転で役所回りをさせて頂き、役所の書庫に直接入るこ

ともできた。薄暗い蛍光灯の白色や、職員が引っ張り出してきた古い青焼きの独特の匂いが今も記憶に残る。

続いて後期課程では、橋本先生が代表となった関大とハワイ大学との共同研究に加えて頂き、ハワイ調査に2度も同行する機会を得た。モロカイ島では、先生が地元の関係者に英語で聞き取りをしているのを横で見たり、タロイモ水田を歩測したりと、私としては地理学実習の再履修の気分であった。ホノルルではかなり自由に行動させてもらい、一人でハワイ大学のハミルトン図書館や水資源研究センターに行って自分の資料の複写ばかりしていた。

勉強会活動の消長も忘れられぬ。先生は機会があれば院生に勉強会の設立を仕掛けられるのだが、ある程度の回数を重ねると会は静かに消えてゆくのであった。

振り返ると、橋本先生から講義を通じて具体的な研究事例や手法を習うことはなかったが、上述の諸々の事項を通じて全体的に影響を受け、結果として今の自分があるのだと思う。まるで砂堆を形成する潮の流れのように、長い時間をかけて、ゆるかった私の足下を固めて下さっていたのだ。

(神戸学院大学・専任講師、1997年卒業、1999年M修了、2009D論文博士)

教え子から

最後のゼミ生として

丸橋由起子

大学を卒業してXX年、久し振りに学生生活を送りたいという我が儘を快く引き受けて下さったのが橋本先生です。一応入学試験を合格してという形は取っていますが、「学問の世界から長く離れたわけのわからない社会人なんかいらん」と思われたらそれでアウトです。でも度量の広い先生はこんな私を受け入れて下さいました。

しかし大学での専攻は地理学ではなかった上に卒論は心臓で書いたと言われていた私。しかも学問の上では長いブランクがありました。ちょっと難しい本を読めば、気がついたら同じ所を何度も読んでしまっていたり、舟を漕ぎ始めていたり。その上、頭にさっぱり入らない。それなのに毎週ゼミで何か発表をすることを求められるという、毎週々々何かに追われるような日々が始まったのです。こんなにしんどいとは！それでも研究室で先生の優しい笑顔が待っていると思えば頑張らない訳にはいきません。

先生の研究室は当然のことながら書籍や資料が一杯で、

その背表紙を眺めているだけでワクワクしてきます。棚には日本語の資料は無論のこと、英語だけでなくフランス語の文献もたっぷり。従って思考はグローバル、長年の研究生活で積み上げた引き出しの数は無限大です。私のどんなにくだらな思いつきにも適切なアドバイスをして下さいますし、自分の考えを押し付けることもなく、「せっかくの社会人なんだから、その経験を活かしたらいい」と励まして下さいます。でも優しいだけでなく、欠けているところも見逃しません。社会人がゆえの妥協は学問では許されないことを再認識し、久し振りに気が引き締まる思いでした。

わずか2年という短い期間ですが、奇しくも先生の最後のゼミ生という幸運に恵まれ、素晴らしい時を送れたことを心より感謝致します。

(2009年3月M修了予定、大阪外語専門学校エアライン科講師)

平成15年3月に卒業し、早や5年あまり…。長年の憧れであった、鉄道の仕事に就く夢を実現させ、大阪市交通局に入局。現在は、大阪の商業の中心地・船場に位置する地下鉄四つ橋線本町駅において、駅員として改札業務やホーム監視業務などに従事しています。

ところで、私は上記業務とは別にもうひとつ、沿線情報紙『水ものがたり』の取材および執筆業務を担当しています。

大阪市営交通（地下鉄・バス・ニュートラム）沿線の「水」にまつわるスポットを紹介する同紙。地下鉄四つ橋線各駅構内（なんば駅除く）で掲示しているのですが、発行を開始するきっかけとなったのが、昨今の社会情勢の変化などを起因とする、利用客および運輸収入の伸び悩みでした。

「少しでも市営交通の利用促進に役立ちたい…」という思いから、私や同期の仲間が中心となって、市営交通沿線のおでかけスポットを駅構内で紹介することを発案。さらに、紹介するスポットの共通テーマを決めるにあたり、大阪の街が古くから「水の都」として市民に親しまれてきた点に着目。「水」にまつわるスポットを紹介することになりました。

製作にあたっては、学生時代にフィールドワークで培ったフットワークの軽さ!?を活かし、私が現地取材および執筆を担当。そして、同期の仲間が編集・印刷などを担当しています。平成18年8月から月一回のペースで

発行を続け、延べ発行数は29号に及びます（平成20年12月現在）。

お客さまからは好評を博し、平成20年春からは交通局HPでも連載を開始。地下鉄四つ橋線をご利用の方のみならず、より多くの方に『水ものがたり』をご覧いただけるようになった次第です（下記参照）。

奇しくも平成21年8月～10月にかけて、中之島公園や東横堀川などを中心に、行政・企業・市民が一丸となったプロジェクト「水都大阪2009」が開催されます（下記参照）。

「水の都・大阪」の魅力を広くアピールしようという同プロジェクト。我々も微力ながら、『水ものがたり』を通じて、より多くの方々に「水の都・大阪」の魅力を発信し、ひいては市営交通の利用促進につなげることができれば幸いです。

みなさまもぜひこの機会に、「水の都・大阪」の魅力を感じに出かけてみてはいかがでしょうか？ その際にはぜひ、安全・快適で地球に優しい大阪市営交通をご利用下さい♪

Webサイト

「水ものがたり」（交通局HP内）http://www.kotsu.city.osaka.jp/eigyou/event/mizu_mono.html

「水都大阪2009」<http://www.suito-osaka2009.jp/>

（こくまい あつおみ：2003年卒業、大阪市交通局高速運輸部大国町管区駅 四つ橋線本町駅勤務）

学窓から

医師の地域的偏在と解消方法

山田小紅美

昨今「医師不足」という言葉をよく耳にする。一口にまとめられてしまうと問題点が曖昧になる言葉だが、医師の絶対数の不足、地域での医師不足、特定診療科の医師不足、夜間の医師不足、そして病院勤務医の不足などを複合的に指して使われている。ここでは地域での医師不足問題について書きたい。

日常の実感としてもわかるように、日本の医療機関の分布には偏りがある。日本では医師の勤務地選定には規制がなく、全くの自由分布となっているため、全国には無医地区が存在する一方で、経営難の声さえあがる医療機関密集地域も存在している。

医師不足地域では、診療所開設に係る費用の一部を助成する制度、医師を県職員として採用し県内の医療機関に派遣する制度、県内の指定医療機関で勤務すれば返還が免除される医学生・研修医対象の奨学金制度などをもって医師確保に取り組んでいる。自治体はいかに医師を優遇して興味関心を持ってもらうかに心を砕き、ボランティ

ア精神にあふれた医師の自主的アクセスが頼みの綱となっている。医師の取り合い状態となっているのが現実とみえる。

限られた医師数で全国の医療体制の向上を目指すには、地域ごとの課題を明らかにし、都道府県を超えて医師を配分調整する機能が必要だろう。行政や医師組織が人事権を持つ、地域・診療科目ごとの定員を設ける、数年間の僻地勤務を義務付ける等の方法が考えられる。ただしこれらのような強制力をつくる方法に医師サイドの反発は強い。なんらかの強制力をつくるのでなければ、勤務医・開業医ともに僻地勤務期間に応じて診療報酬が上がるなど僻地勤務が高所得につながったり、院長など高位のライフステージに上がるためのキャリアのひとつになったり、社会から評価されたりと、これまでの僻地勤務医優遇策路線を促進するのが現実的だろうか。医師の生活の希望と公益性のバランスをどう確保するか。みなさんはどうお考えだろう。（学部4回生）

研究ノート

東京都特別区部における住宅と人口の地域的特徴とその動向

堀内 千加

I. はじめに

住宅の形態や開発の地域的差異は、年齢をはじめとした居住者の属性を既定するものである。

由井(1991)は、福岡市を対象として、住宅形態と居住人口の属性について検討し、高層の民間借家には若年単身者、郊外公営住宅には若年親子世帯、戸建住宅には壮年世帯が居住する傾向があることを明らかにした。

そこで、本稿では、近年人口と持ち家共同住宅と民間借家の増加がみられる東京都特別区部を対象として、1990年以降の住宅と人口の地域的特徴とその動向について検討することとする。

II. 東京都区部の住宅と人口の地域的特徴

東京都区部を以下のように4地域に区分した。

- 都心区：千代田区・中央区・港区
- 中心区：新宿区・文京区・台東区・渋谷区・豊島区
- 南西部：品川区・目黒区・大田区・世田谷区・中野区・杉並区・練馬区
- 北東部：墨田区・江東区・北区・荒川区・板橋区・足立区・葛飾区・江戸川区

この地域区分に則り、それぞれの地域の人口動向をみると次のようになる。

表1 東京都特別区部地域別人口増加率 (%)

	1980-1990年	1995-2000年	2000-2005年
都心区	-21.5	10.0	21.7
中心区	-12.6	2.4	4.7
南西部	-0.9	2.5	3.4
北東部	2.3	1.0	3.9

1995年以降、東京都特別区部や大阪市などの大都市の都心部では人口の回復現象がみられることが指摘されている(富田, 2004)。東京特別区部では、全域で人口増加がみられるが、特に都心部では人口増加率が高く、1995-2000年は10.0%、2000年以降の人口増加率はさらに上昇し21.7%となる。

一方で、都心区での人口減少率が21.5%と高かった1980-1990年の間、中心区・南西部でも人口は減少するが、

北東部では増加している。

次に、地域別に2005年の所有関係・建て方別⁽¹⁾住宅の構成比をみることにする(図1)。

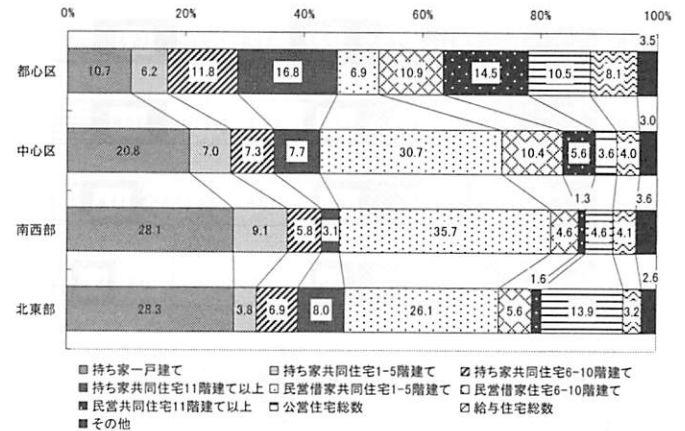


図1 地域別2005年の住宅の所有関係・建て方別住宅の構成比

都心区では、持ち家一戸建て世帯の割合は低く、6階建て以上の高層の持ち家共同住宅世帯、民間借家世帯の割合が高いことが特徴となる。一方で、中心区や南西部、北東部では、持ち家一戸建て世帯の割合と、1-5階建ての中低層階建の民間借家世帯の割合が高い。

都心区とその他の地域では、住宅形態は大きく異なるが、都心区と北東部は、公営住宅の割合が高いという類似点があり、それぞれ10.5%と13.9%となっている。

そこで、以下では、都心区と北東部の住宅と年齢別人口の動向についてみることにする。

III. 都心区と北東部の住宅と年齢別人口の動向

1. 都心区

都心区では、持ち家の一戸建て世帯、民間借家の中・低層階建世帯の割合は、1990年と比較すると2005年には約半分となる(図2)。その一方で、6階建て以上の高層階建の持ち家共同住宅世帯と民間借家世帯の割合は、同期間に倍増している。公営借家世帯の割合には、ほとんど変化はみられない。また、経済不況により、給与住宅世帯の割合は低下傾向にあるものの、2005年においても8.1%と高い水準を保っている。

年齢別人口の推移をみると、25-34歳、35-44歳人口の割合は上昇している。その一方、0-14歳、15

～24歳の人口の割合は低くなっている。25～44歳の増加に伴い、45～64歳の人口割合は1995年以降低下し、65歳以上人口も2000年以降低下している。

都心区では、高層の持ち家共同住宅世帯や、民間借家世帯の増加により、子どもを伴わない25～44歳の人口の増加が進んできたことがわかる。

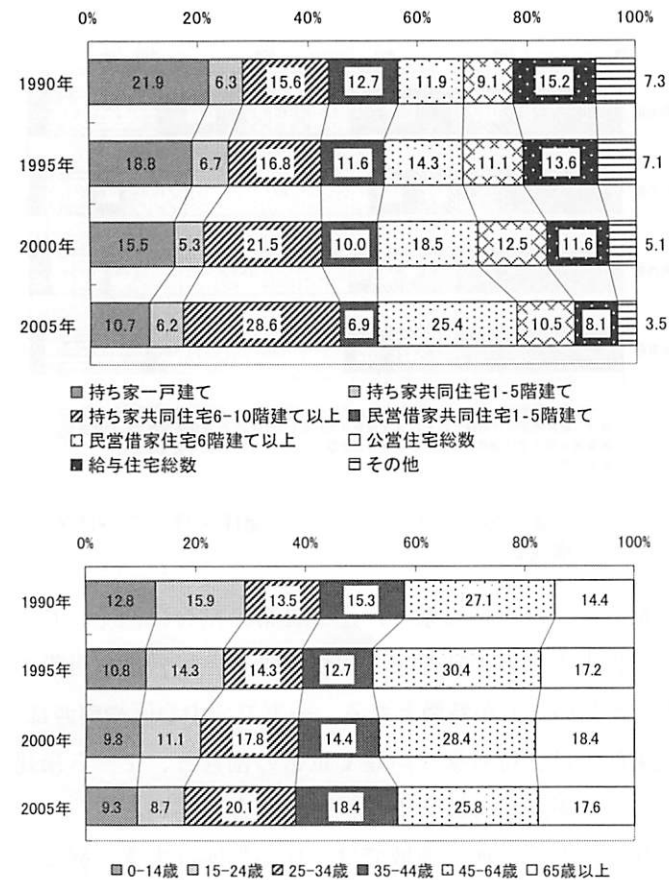


図2 都心区における住宅形態別比率と年齢別人口比率の推移

2. 北東部

北東部では、1990年以降、住宅の形態別割合の大きな変化はみられない（図3）。2005年でも、持ち家一戸建て世帯と中・低層の民間借家世帯はそれぞれ3割程度を占めている。また、公営住宅世帯の割合も、1割以上と相対的に高い割合を示している。しかし、高層階建の持ち家共同住宅と民間借家世帯の割合は、1990年から2005年の間に倍増している。

年齢別人口の推移をみると、65歳以上の人口の割合は上昇を続け、2005年には18.7%となっている。また、2000年以降は若干の低下がみられるが、45～64歳の人口も3割程度と高く、高齢化が進んでおり、今後も高齢化の進展が予測される地域であることがわかる。

2000年以降の35～44歳、25～34歳の年齢層は、都

心区と比較して相対的に低い。一方で、0～14歳、15～24歳の割合は相対的に高く、子どもを伴う世帯が多いと考えることができる。

したがって、北東部では、持ち家一戸建て世帯や、中・低層の民間借家世帯、公営借家世帯の割合が高く人口の高齢化が進むが、子どもを伴った世帯も多い。また、近年高層の持ち家共同住宅や民間借家の建設が進み、人口の受け皿として機能しているものといえる。

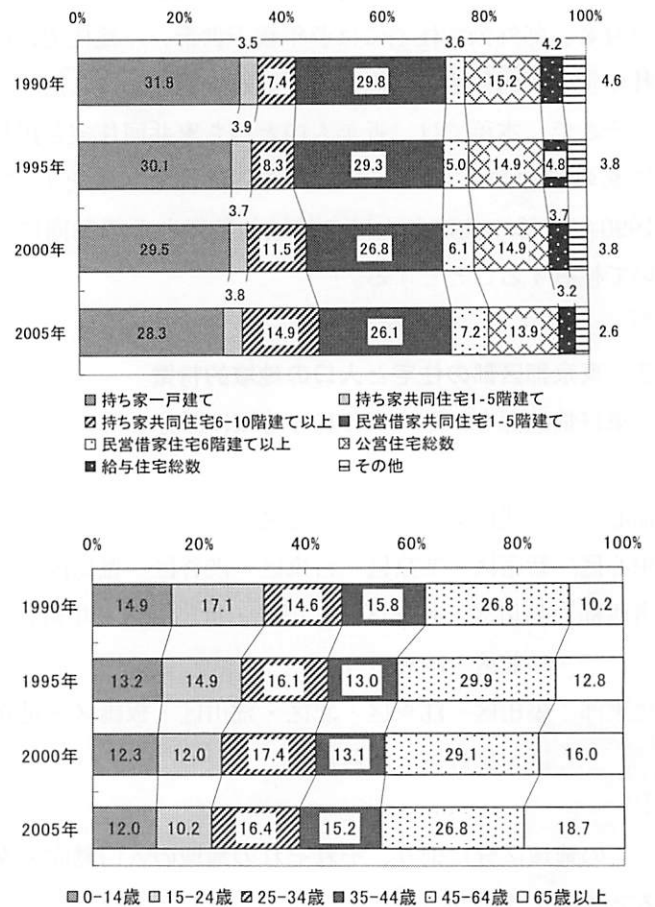


図3 北東部における住宅形態別比率と年齢別人口比率の推移

注

(1) 所有関係とは、持ち家、公営の借家、民間の借家、給与住宅、間借りに分類される。また、建て方とは、一戸建て、長屋建て、共同住宅、その他に分類される。

【参考文献】

富田和暁 (2004) : 大都市都心地区における最近の人口増加動向、『人文研究 (大阪市立大学)』55、113-140頁。

由井義通 (1991) : 住宅供給の類型化にみた居住者特性の分化—福岡市を事例として—、『地理科学』46-4、242-256頁。

(ほりうち ちか : 関西大学大学院・文学研究科 博士課程後期課程)

実習調査報告

壱岐実習調査報告

増田 妃

10月6日～9日まで3泊4日で合宿調査に長崎県壱岐市に行った。博多港に集合して、高速艇で、壱岐の芦辺港におりた。すぐに壱岐牛を売る「焼肉うめしま」で昼食。店主にお話もしていただいた。手塩にかけて育てた牛を手放すのはやはりとても胸の痛むことらしい。その後原の辻遺跡がある埋蔵文化センターへ向かい見学し、市役所石田庁舎に到着した。観光商工課で統計資料をもとにお話を伺った。不安は残りつつも、これから調査が始まるのだということを実感した。旅館に戻るとお女将さんが笑顔で迎えてくれた。滞在中の方々には食事の用意から車の手配、運転に至るまで大変お世話になった。

2日目は各班で行き先もさまざまだった。私の浦班は触班とともに渡良浦地区の区長宅で、浦、触合わせた全体の歴史やコミュニティについて話をうかがった。午後からは浦の区長宅で聴き取りをした。私達はまず小崎浦から調査を始めた。到着するとそこは海の匂いが漂う海士の町であった。浦を一周するとすぐに地元の海士の方に声をかけられ、大変貴重なお話を伺うことができた。午後には公民館長さんへの聴き取りと家屋調査をして、6時に宿へ戻った。8時半からのミーティングでの各班の報告は大変興味深いものでいい報告書を作りたいという思いは一層深くなった。

3日目は午前中ベトナム人留学生のハートインさんと小崎浦を一周した。私たちの日本語と英語のしどろもどろな説明を必死に英語でメモをとっている姿が印象的だった。その後、住民の方々にも多少怪しまれながらも黙々と家屋景観調査を進めた。その後、渡良浦へ移った。小崎、



印通寺のフェリー乗場にて

渡良合わせて約150軒の家屋景観調査を完了し、とりあえず気持ちも一段落した。4時半に宿に戻り、その日の食事は地元の魚尽くしでとてもすばらしかった。

最終日は印通寺からフェリーで東唐津にわたり、貸切バスで呼子の町、名護屋城址と博物館を見学、美しい棚田を見ながら、バイパス経由で博多駅へ到着、そこで解散した。今回の巡検で同じ九州人であることもあり、完全にホームシックになってしまった。やはり、九州の人間はまた関西の人間とは違った温かさがある。海士集落で聴取りを行うことを始めは多少恐れていたが、皆温かく迎えていただいた。こんなにも地理について考えたことはなかったのでこれから取り組んでいく卒業論文にも役立つ経験となったであろう。最後にこの巡検の準備をくださった高橋先生、野間先生、TAの松井さん、温かく迎えてくださった壱岐の方々、調査を引っ張ってくださった院生、一緒に調査した同回生のすべての人に感謝したい。(学部3回生)

日帰り巡検報告

尼崎日帰り巡検

羽原 康雅

2008年10月19日(日)、尼崎市内で教室と地理学研究会共催の日帰り巡検に参加した。今回はM1の先輩方が資料を用意され、D課程の先輩方とともに要所で説明をして頂き、大いに勉強させてもらった。

今回の巡検では阪神電車尼崎駅に集合し、旧中国街道に沿ってまず尼崎センタープール(競艇場)へ、東西南北に延びる出屋敷・中央・三和商店街で昼食を各自で済ませた後に、伝統的な町並みが残る寺町地区を訪れた。その後、尼信博物館と世界の貯金箱博物館を見学。ここでは「中世尼崎の風景展」と題された特別展示がされており、大変興味深かった。その後、震災時の液状化現象によって大きな被害を受け、今日では復興された築地地区を見学し、尼崎城があった大物地区に入った。城跡に建つ小学校に入らせて頂き、古い小学校や城の資料等を見学した。最寄りの大物駅から杭瀬駅まで移動し、

杭瀬商店街を歩いてバスに乗りしJR尼崎駅まで移動した。再開発が進む同駅周辺の説明を聞いて解散した。

私は今回の巡検を終えて一つの疑問を持った。それは城下町の構造に関してだ。ヨーロッパの古い都市や中国の北京をはじめとする都市は、街全体が高い城壁や堀で囲まれた状態で、城の中に街があるが、今回訪れた尼崎を含め、私が知っている城下町は街全体が城壁や堀に囲まれてはいない。つまり城の外に街が形成されている。外敵から防衛するという城の機能は同じなのに、どうしてこのような都市構造の違いが生まれたのだろうか。

最後に日帰り巡検でご案内頂いた高橋・野間先生、院生の方々に御礼申し上げます。来年の巡検・実習調査が待遠しく、楽しみにしてきました。皆で頑張っていきたいと思う。(学部2回生)

2008年度
卒業生・修了生
からの一言

上野修平

一度ドロップアウトした自分が卒業できるのも、この1年間一緒に頑張った3回生、4回生および院生、そして先生方の励ましのお蔭です。皆さん、どうも有難うございました。

久米康絵

地理学ゼミに入って、まわりには好奇心の旺盛な人が多く、刺激的な大学生活を送りました。新しく始まる生活でも精一杯頑張っています。

上田直樹

和歌山巡検や沖縄帰仁調査など、普通ではできない多くの経験や知識を得ることができました。非常に充実した4年間でした。

倉嶋ひとみ

個人的に楽しい友人・先輩とともに通常文学部では学べない測量や沖縄実習調査など、貴重な体験をさせて頂き、一生の思い出ができました。

斎藤鮎子

長い様で短かった大学生活。友達は多いほうだとは言えないけれど、地理では多くの仲間ができました。また先生方には本当にお世話になりました。ありがとうございました。

澤部竜志

地理学に関して無知な状態でしたが、フィールドワークを重ねて知識を身につけ、教室のみならず頑張れてよかったです。

杉本 隆

フィールドワークで学んだ経験は就職活動でも多いに力になりました。地理学で学んだ知識は僕の一生の財産です。ありがとうございました。

大学生活でたくさん
のところにいき、た
くさんの出会いがあ
りました。そのキッ
カケと行動力を与え
てくれた地理学と先
生方に感謝していま
す。4年間本当にあ
りがとうございました。

土岐里美

地理学教室で学んだ
3年間は、好きなこ
とばかりしました。
無知で未熟な私を支
えてくれた友人、親
身になって話しを聞
いて下さった先生方
には感謝しています。

藤森久美子

今帰仁村の実習調査
は学生生活で一番い
い経験になりました。
この地理学で学んだ
ことを社会に出て活
用していきたいと思
います。

船瀬奈月

沖縄調査は一生忘れ
られません！いつか
福木を庭に植えたい
です(笑)。今まで
の人生で一番充実し
た4年間でした。
地理万歳☆

山田小紅美

地理学教室で習得し
たこと：①臆さず人
に道を尋ねる度胸②
瞬時に写真を取る技
術③手回きトレス、
イラレという味に
楽しい遊び。

山本健一

大学生活は、様々な
方にお世話になりま
した。中でも、同回
生の皆には、とても
感謝しています。卒
業後も、何年かに1
度は飲みましょ
(笑)!!

水落仁美

地理学から学んだこ
とが、自身の力とな
ったことを嬉しく
思います。また先生
方のご指導、院生方
のサポート、本当に
ありがとうございました。

【論文】

- 高橋誠一・松井幸一・松井僚平、2008。今泊の集落景観と保全。今帰仁村、教育委員会発行の調査報告。
木庭元晴・白澤武蔵・千葉太郎、2008(投稿中)。考古遺跡産泥質堆積物のX線像から検出された人的擾乱。なにわ・大阪文化遺産学叢書No.10、pp.67-76。
岡田良平、東北タイにおける学校施設拡充過程に関する教育地理学的考察—ドンデーン村小学校を事例として—、2008。『新地理』(日本地理教育学会)、第56巻3号、pp.14-37。

【学会発表】

- OKADA Ryohei, Boualamthong ONETHAVONG*, NOMA Haruo, 2008. : Comparative Rural Study on Geography of Education in Northeast Thailand and Vientiane Plain from the Point of School History, *International Symposium, Sustainable Resource Use and Management in Lao Lowland and Northeast Thai Villages under the Contemporary Economic Transition: Comparative Integrated Rural Studies*. コンケン大学教育学部。2008年1月17日
NOMA Haruo, OKADA Ryohei 2008. : School Facilities and Glocal Environmental Education in Lao Lowland Villages : Forest Resource Management and Socio-economic Changes, 2008年7月5日(日)。グローバル環境教育国際会議2008。北海道教育大学札幌校
松井幸一、2008。那覇市における湧水拝所と集落立地。2008年度日本地理教育学会(三重大学)。
Nguyen Thi Ha Thanh・野間晴雄、2008。ハノイ近郊の農地転用が農民に与える悪影響について—ハノイ直轄市メッチー社トゥーリエン県の事例—。2008年度人文地理学会大会(筑波大学)。
谷真理子、2008。洛陽二十八宿妙見巡りの分布形態から考える「四神」。関西大学史学・地理学会2008年度大会(関西大学)。
白澤武蔵・佐藤亜星・千葉太郎・木庭元晴、2008。奈良県下三橋遺跡道路側溝堆積物の薄化試料を用いた堆積構造の解析Ⅱ。関西大学史学・地理学会2008年度大会(関西大学)。
上野裕、2008。戦前期京都の土地区画整理事業。関西大学史学・地理学会2008年度大会(関西大学)。
小泉邦彦、2008。小学校・中学校の地理教育のカリキュラム構成論と指導方法。関西大学史学・地理学会2008年度大会(関西大学)。
徳田匡秀、2008。伝統的建造物群保存地区の現状—山口県柳井市古市金屋を例に—。関西大学史学・地理学会2008年度大会(関西大学)。
丸橋由起子、2008。山里の外国人観光—京都府美山地区を事例として—。関西大学史学・地理学会2008年度大会(関西大学)。
東出修一、2008。装置としてみる日本の海外旅行40年—制度・仕組—関西大学史学・地理学会2008年度大会(関西大学)。

教室だより

■橋本教授古稀・退職記念特別号の刊行

本号(第60号)は通常の「千里地理通信」の内容に加えて、2008年9月に古稀を迎えられ、2009年3月末をもって関西大学を定年退職される橋本征治教授の特別号とした。先生自身による回想文を巻頭の1~2頁に置き、そのあと履歴・主要業績を掲げた。より詳細な履歴と全業績(発表年順)は別途刊行される『千里地理成長記2』に掲載したので、ここではなるべく先生のお仕事の全容やお人柄が卒業生や学生・一般の方にわかるように、単著に関しては章目次を掲げ、オリジナルの論文のリストは本に所収されていないものに限って精選して掲載した。一方、ふだんは目にしにくいエッセーなどのリストはつとめて掲載した。橋本先生はこの「千里地理通信」にも本号を含めて15編の珠玉のエッセーを執筆されている。次いで、「教員から」として教員4名による先生のお仕事の紹介や教育のエピソード、思い出などを掲載した(4~7頁)。そのあとに「教え子から」として、卒業・修了年次順に4名の方に寄稿いただいた文章を掲載した。

なお別途刊行される『千里地理成長記2』には、末尾至行先生のご退職に合わせて1987年

3月に刊行した『千里地理成長記』の続編という意味をもたせている。1998年以降2009年3月までの教室の歴史やカリキュラムの変遷、卒業論文・修士論文・博士論文のタイトル、研究会・日帰り巡検の記録なども掲載し、この2冊をみれば教室の40年の歴史が資料として俯瞰できるようになっている。ただし、日本の新制大学の地理学教室のなかには創立50年を迎えるところもでてきており、りっぱな教室史も刊行されている。橋本先生は創立50年の折にはこの資料を活かした『教室50年史』ができることをわれわれに対して希望を述べられている。第2部は橋本先生に関する「思い出」の文集としたが、教室からの呼びかけに賛同していただき寄稿いただいた41名の卒業生・現役大学院生の方にお礼を申し上げます。

■『千里地理成長記2』の刊行

橋本征治先生の古稀とご退職を記念して、卒業生の思い出文集と橋本先生の履歴・研究業績、1998年以降09年3月までの卒業論文・学位論文一覧、教室設備、千里地理通信の目次、研究室の41年間の記録などと橋本先生自身による教室の回顧についての寄稿をいただいて、『千里地理成長記2』として2009年3月28日に刊

行の予定。なお、同日開催予定の古稀記念祝賀行事に参加された方には配布します。若干の残部が教室にありますので、希望者は送料込みで2500円を研究会の振替口座に振り込んでいただければ送付します。ただし、経費の関係で印刷部数を抑えたため、あらかじめ、教室宛、電話・メール等で残部の有無をご照会いただければ幸いです。品切れの節はご容赦下さい。

■博士・修士論文中間発表会

2008年9月12日(土)10時～16時半、地理学・地域環境学実習室で行われ、以下の発表が行われた。

高島正樹(M1):重伝建地区における景観と構成要素一町並みを映し出す色彩と空間—
東出修一(M1):装置としてみる日本の海外旅行40年—制度・仕組・行動・経済力・文化—
松田玲(M1):西宮市北部の地域特性からみる消費購買行動の考察
周申申(M1):現代水環境の創造と都市ウォーターフロントの開発—上海市と大阪市の比較—

叶晨(M1):植生の変遷と近郊農山村の社会変容—茨木市を事例として—
松井僚平(M2):今帰仁村今泊集落・恩納村安富祖集落における風水景観の現状と課題—主にヒンブンを中心として—
白澤武蔵(D1):奈良県下三橋遺跡条坊側溝堆積物の薄化試料を用いた堆積構造の解析2
上野裕(D1):近代都市形成における都市政策の役割—京都の土地区画整理事業を例に—
谷真理子(D1):洛陽二十八宿妙見巡りの分布形態と天文・風水・宗教思想
小泉邦彦(D1):地理概念を育てる地理カリキュラムの構成論

芦田淳一(D2):方広寺造営にみる近世の幕開け

松井幸一(D3):那覇市における湧水拝所と集落立地

堀内千加(D3):京都市における住宅と人口の空間パターン

Nguyen Thi Ha Thanh(D1・文化交渉学専攻): Negative impacts of agricultural land transition on peasants in suburb area of Hanoi, The case study in Me Tri commune, Tu Liem district, Hanoi, Vietnam

■地理学・地域環境学実習調査

2008年10月6日(月)～9日(木)の3泊4日で、長崎県壱岐市で実施した。指導教員は高橋誠一・野間晴雄。ベトナムからの留学生1名、中国からの留学生2名、社会人院生3名を含めて3回生20名、大学院生が8名(うち1名はTA)、教員2の計30名で実施した。主な調査項目は、海外地形・植生・漂着物、触の集落地理、浦の集落地理、農業、水産業、観光、平成の町合併などでである3月に報告書『長崎県壱岐市の地理』を発刊予定。

■尼崎日帰り巡検

10月26日(日)10時～17時で、尼崎の日帰り巡検を関西大学地理学研究会行事と合わせて実施。現地案内はM1の東出、松田、申、叶、高島。2回生～Dコースの大学院生、OBなど35名が参加した。教員は高橋誠一、野間晴雄

が参加。コースは阪神武庫川駅—出屋敷—阪神尼崎—尼崎城下町—JR尼崎駅。その報告は13頁を参照されたい。

■地理学研究会の開催

2008年12月13日(土)15:00～17:30に、A棟503教室で地理学研究会第95回例会を開催した。発表者は、M1による「壱岐市実習調査概要」の発表(登壇者は松井遼平)、堀内千加(博士課程後期課程)「わが国にける近年の都心部の人口回復現象について」、辻康男(パリオサーヴェイ(株))「地理学教室で学んだ地形学を軸とした地質コンサルタントとしての現業務・研究」、野間晴雄(関西大)「関大vs関学—大学と郊外の系譜学—」。懇親会はチルコロで18:00～20:00で開催した。参加者は62名。

なお、会に先立ち、同会場で3回生向けの卒論セミナーを開催した。卒論講話は橋本征治教授。その内容の一部はこのニュースレターの巻頭でも触れられている。

■木庭元晴教授の在外研究

木庭元晴教授は2009年2月15日に次のようなメールが届いた。「いま、ニュージーランドの水河にきています。かつて読んだ教科書や論文に比べて余りの違いに驚きました。水河の上を数時間歩いてみて、すごく自然に種々のメカニズムが理解できました。疑問も残りました。ニュージーランドとオーストラリアのぼくが発見した山岳崩壊の研究をすることで来たものの、三ヶ月を本の執筆に取られました。地球温暖化メカニズムに関する新しい発見もありました。」

■教員外国出張

野間晴雄:2009年1月16日～23日GCOE経費によるプラントハンター調査、英国(キュー植物園)。2009年3月1日～11日、日本学術振興会(海外学術調査)によるカンボジアでの資源利用調査、ベトナムでの打ち合わせ。

■博士学位論文の提出

下記の3名が2008年11月に博士学位論文を提出し、この3月21日に学位が授与される予定。今年度から口頭試問に代わって、一般公開形式の公聴会が全学的に実施されることになった。地理学専修では2009年1月27日(火)11時～15時に、尚文館で1人1時間の配分で実施された。院生・一般の参加者による活発な質問もあり盛会であった。

<論文博士>矢嶋 巖:生活用水・排水システムの空間的展開(主査:橋本征治)

<課程博士>松原光也:現代日本の地方中心城市における公共交通の再生とまちづくりに関する地理学研究(主査:伊東理)。岡田良平:ラオ文化圏における農村社会の学校施設と進路選択の変容に関する教育地理学的研究—東北タイ・ビエンチャン平野農村の比較—(主査:野間晴雄)

■お詫び

千里地理通信第59号の「新入会員紹介」で、社会人入学の上野裕(D)、小泉邦彦(D)、東出修一(M)の3名の方に依頼するのを担当者が失念しており、掲載できませんでした。深くお詫び申し上げます。

岡田良平
タイとラオスの農村を約5年にわたって研究してきました。先生や教室の皆さんにはお世話になりました。ありがとうございました。

舟越寿尚
学部を引き続き、地理学教室の先生方ならびに先輩はじめ皆さん方にはお世話になりました。これからも「地理学」を愛していきたいと思っています。

池田大志
学部から含めると6年間もの間、地理を通して成長させて頂きました。ここで学んだことを社会に出て発揮できるように精進していきます。

松村 弘
「大阪を世界都市」にする、そのための関きを求めて院にきました。夢を持ち続けなければ必ずや叶えられます。

徳田匡秀
「なんとかなる」が口癖の私が「なんとかなかった」(修了できた)のは、周りの方々の支えがあったからです。本当にありがとうございました。

丸橋由起子
先生と若い先輩方にいっぱい教えていただき、助けてもらいながら、学ぶことの楽しさを再認識した充実の2年間でした。ありがとうございました!

的場貞之
関大生活12年目にしようやくピリオドを打つことが出来ました。お世話になった先生、先輩方には多大なる迷惑をおかけしましたが無事に修士を修了しました(と思えます・・・汗)。ありがとうございました!!

随想

地理学と里山学の 出会い

細谷 和海

動機づけは原体験

私と地理学との出会いは、小学校の時にさかのぼる。きっかけは単純である。私は生まれも育ちも東京ではあるが、両親は静岡県御殿場市の出身で、夏休みはいつも富士山の裾野にある親戚の家で過ごした。多種多様な生き物、溶岩流や火山性の土壌、夏でも涼しい風穴、豊富な湧水、富士山が創出する自然は目を見張るものばかり。水菜（野沢菜に似る）やわさび栽培、お蚕さん、自家製の醤油や味噌、ヤギ乳、しどめ（クサボケ）の実の塩漬け、水田養鯉のコイなど、自然に密着した農村の生活ぶりや風情、それに特有のズーズー弁は都会育ちの私にとって魅力的な異国そのものであった。夏休みも終わりと、東京に帰ると、さっそく地図帳を開いて御殿場市を確かめた。思えばそれが私にとっての「地理学との出会い」のようであった。地図帳は常に新鮮な情報に満ちている。当時、御殿場市の人口は約4万人ほど。同じくらいの人口を持つ各地の都市と比較して、さまざまに想像をめぐらしたものだ。地図帳の統計に目をやれば、てっきり外国産と思っていた産物について、三重県で紅茶が製造されていたり、新潟県から原油が産出されていたりしたことに驚いたものだ。やがて「地理」は得意科目となり、大学受験の「社会」ではおのずと「地理」を選択することになる。

分野を超えて

そもそも私の専門は魚類学である。釣り好きな父親に休日ごとに魚釣りに連れて行かれた。そのことが、私の進路を決めてしまった。釣り場は、住まいの近くを流れる江戸川や千葉県房総の池沼や海岸地帯。もちろん夏休みに訪れる御殿場市の溪流や水田脇の小溝もお気に入りの「獵場」であった。私の興味は、派手な熱帯魚や大きな海産魚ではなく、里山などにいる身近な淡水魚にあった。それは明らかに幼少時の原体験が育んだものに違いない。進学先は迷うことなく京都大学農学部を選んだ。京大の魚類学研究室で琵琶湖の淡水魚を研究することは、最大の目標となっていたからである。

地理学と魚類学、まったく関連のなさそうな学問領域

を、実は私の原体験がしっかりと結びつけている。メダカやドジョウなどの淡水魚は、いずれも水田地帯を主な生息場としている。これらの淡水魚は水田が放棄されると姿を消す。彼らは、稲作を介した適度の人為的攪乱がなければ生き抜くことができない。人為的攪乱というのは、手作業を主体とした伝統的農林業で見られる維持管理を指す。生物多様性の保全と持続的な社会を目指すとき、そのことから学ぶことは実に多い。

里山学へのいざない

私が勤務する近畿大学農学部は、奈良県と大阪府を分ける生駒山地に並走する矢田丘陵の東側にある。西奥はそのまま森林につながり、キャンパスはまさに里山環境の中にある。1960年代までは盛んに稲作が行われていた。そのためキャンパス内にはいたるところに放棄された棚田、隠し田、ため池が散在している。現在では遷移によりいずれも荒地と化している。近畿大学では里山修復プロジェクトを立ち上げた。キャンパスを昔ながらの里山に復活させようという試みだ。最初にキャンパスの自然を、手をつけない部分（保全区）と手をつける部分（修復区）に分け、プロジェクトの案を練った。計画に沿ってプロジェクトは実施に移され、すでにカスミサンショウウオなどの野生生物保護区が設定され、棚田が復活し、ため池は外来魚が駆除され希少魚ビオトープに生まれ変わった。キャンパス内の生物調査、棚田の維持管理、ため池の泥さらいなど、修復活動の主体は学生だ。現在、近大の里山修復のとりくみは、文部科学省の現代GP (Good Practice) に認定され、環境教育のモデルとなっている。

今、関西大学では文学部の講義科目では「環境地理研究」と「地域生態論」を、大学院文学研究科では「M地域環境学研究B」をそれぞれ教える機会を与えられている。私の原体験と関大生の新たな発想から、理系・文系の領域を超えて「いなかのよさ」を科学して行きたい。(近畿大学大学院農学研究科・教授、近畿大学里山修復プロジェクト・委員長、関西大学・非常勤講師)

千里地理通信 第60号

2009年3月9日 発行

関西大学地理学研究会

〒564-8680 吹田市山手町3丁目3-35

関西大学文学部地理学・地域環境学教室内
編集担当：野間晴雄 白澤武蔵 高島正樹

TEL：06-6368-1121（内線4890：大学院生室）

e-mail：moto@ipcku.kansai-u.ac.jp

URL：http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/

~moto/KU_Geography/

郵便振替：大阪00970-4-81149